

シンポジウム6

走行管理に向けた取り組み(愛知Cデジタコ導入の成果, 活用)

山田 忍(愛知県赤十字血液センター)

デジタルタコグラフ内臓型ドライブレコーダーを導入して3年目を迎え、一定の成果が得られたので、これらの活用方法や取り組んでいる内容について報告する。

1 愛知センター供給課の状況

愛知県赤十字血液センターでは、移動採血車を含めて78台の車両を保有しており、そのうち33台にデジタルタコグラフ(以下、デジタコ)を搭載している。このうち、26台は供給部門が保有する緊急自動車であり、愛知センター供給課に21台、豊橋事業所供給課に5台配備されている。供給部門以外では、献血部門の献血運搬車に7台デジタコを搭載している。この内の愛知センター供給課が保有する21台の緊急自動車の運行に関わるデジタコの成果・活用について報告する。

なお、愛知センター供給課の平日の緊急自動車の供給体制は、日勤帯が13台、時差勤務が2台、夜間勤務が3台稼働している。また、1台あたり

のひと月の平均走行距離は約4,000kmである。

2 デジタルタコグラフを運用するために必要な機器

【図1】の左側枠内の機器一式を緊急自動車に設置している。このうち外部モニターや赤外線カメラなどは、オプションなので購入しておりません。

運行の記録には、SDカードを用いる。配送担当者は個人専用のSDカードを所有しており、乗務するごとにデジタコ本体にセットし、乗務後は、供給課事務室内にある専用のパソコンで運転日報の印刷と運行データの保存をしている。

医療機関への納品については、エンジンを切って停車した場合、GPSの位置情報が記録され、「運転日報」出力時に医療機関名と納品時刻等が記載される仕組みとなっている。

デジタコ本体、ソフトウェア等の購入費用と取付費用で、1台あたりに換算すると約25万円です。

機器としては「ドライブレコーダー」と「デジタルタコグラフ」が一体となっているので、個別に報告

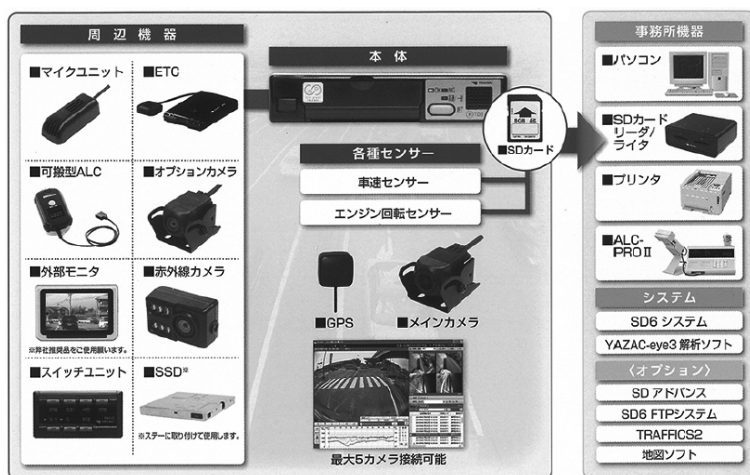


図1

をする。

3 ドライブレコーダー導入の目的と成果

ドライブレコーダーは、(1)走行状況を映像で記録することにより、運転マナーの向上や車両事故減少に貢献 (2) 事故や苦情発生時に迅速な状況把握 (3) 安全運転管理から事故処理に至るまで多様な目的に対応の3項目の目的をもって導入した。

(1)については、供給課内で安全運転講習会を開催し、事故発生時の画像を確認・検証をすることにより、運転マナーの向上や運転時の注意点を課内で共有することで、大きな事故の減少に貢献している。また、配送担当者が映像に記録されていることを意識し、安全運転に心掛けるようになった。

(2)、(3)については、映像が記録されているため、事故発生時の検証および証拠として活用している。

4 デジタルタコグラフ導入の目的と成果

デジタコは、(1)運転状況が記録されることによる危険運転防止、運転者個人の傾向を把握し、具体的な運転指導を実施 (2) 事務処理時間の削減による配送担当者の負担軽減と経費節約 (3) 専用解析ソフトを活用することにより、解析結果を基に個々の安全運転指導 (4) 走行経路の把握の4項目

の目的をもって導入した。

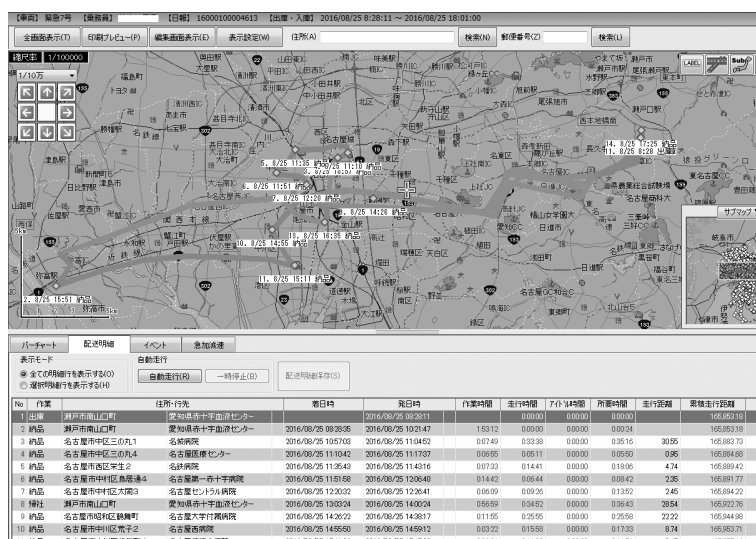
(1)については、運転日報の評価により、運転の傾向を把握することになり、副安全運転管理者や供給係長から個別に具体的な指導を行うことが可能となった。また、運転日報のデータを用いて指導を行った結果、重大な事故を減少させることができた。

(2)については、手書きの運転日報からデジタコを導入したことにより、血液センター発着時および医療機関発着ごとに記載していた運転日報の記入時間が削減できた。また、従来のアナログ式タコグラフで乗務ごとに使用していた専用チャート紙の購入が不要となった。

このほか、デジタルタコグラフのデータを引用することで、ETCシステム利用記録簿の作成が容易になり、事務処理の時間を大幅に削減することができ、昨年度途中より、ETCシステム利用記録簿の紙ベースでの運用は愛知センターとして廃止に繋がった。ETCシステムの利用明細簿を廃止したことにより、利用明細書印刷用のロール紙も不要になり、経費の削減ができた。

さらに、運転日報のデータから車両別に運行回数、走行距離を集計することで、車両の使用頻度に偏りが出ないように配車する指標としても活用している。

(3)については、配送担当者(28名)の走行に対



する評価のデータを取りまとめ、下位10名に具体的な指導することで活用をしている。さらに評価が悪い配送担当者には個別に指導を実施することで、運転マナーの向上や車両事故減少に貢献している。

また、運転日報のデータを蓄積し、集計結果を月別でランキングにすることもでき、ランキングは供給課事務室内に掲示し、配送担当者が自身の順位を確認できるようにしている。

(4)については、運転日報のデータを基に【図2】のように走行経路が記録される。一般道路や高速道路を走行した際の経路であり、ドライブレコーダーの映像と合わせて確認をすることで、詳細な検証をすることができる。また、走行経路の詳細を見ることができ、急加速や急減速、速度超過などがあった場合、何時どの地点で発生したかを確

認することもできる。愛知センターでは、新規採用職員向けのコース研修において、配送ルートの復習に活用している。

5 まとめ

現状では、デジタコの導入にあたって設定した目標を概ね達成できており、データを活用することにより、供給課内での安全運転講習会の開催や副安全運転管理者や供給係長から個別に具体的な指導を行うことが可能となり、運転マナーの向上や車両事故減少に貢献することができている。

また、事務処理時間の削減による配送担当者の負担軽減と経費節約も可能となった。

デジタコの機能を活用しきれていない部分も多々あるが、さらなる安全運転に努め、車両管理業務・指導に役立てていきたい。